



アネゴ肌

10月30日

Sudden Fiction Project

高階 經啓
hirotakashina

10月30日のおはなし「アネゴ肌」

そして君がやってきてぼくの隣に座る。

「デビューだって？」

「はい」

同い年なのに敬語は変なんだけど、君の前ではなぜか目上の人相手みたいにしゃべってしまう。君があんまりにもアネゴ風だからだ。デビューCDのパッケージを見せるとぼくの手からひょいと取り上げ、少し顎を突き出して、じろじろと見る。ぼくがこの曲を書きながら思い浮かべていたとおりのポーズと表情だ。

「おー、メジャーじゃん」クレジットの社名ロゴを指さして君は言う。「よかったね、マジで」「うん」ぼくは、自分でもバカだなと思うけど、大したことなさそうな顔をして返事する。「まあね」

「なにスカしてんだよ！」いきなり君がぼくの頭をはたく。そういうの、やめてほしいんだけどな。「素直に喜べっつーの。で、どんな曲なの？」

「え？ ああ」最初から聞かせるつもりだったんだけど、いま気づいたような顔をしてiPodを取り出す。「これに入ってるけど、聴きます？」

君が面白そうな顔をしてぼくを見つめるのでドギマギする。彼女の分のイヤホンを渡す。しまった。2人で聞けるイヤホンをつけている時点で、聞かせる気満々なのがバレバレじゃん！ でも彼女はそこには突っ込まず、黙ってイヤホンを耳につけて待っている。だからぼくはそそくさと演奏を開始させる。

「あっはははは」狙いに狙った甘ったるいイントロを聴いて君は笑う。「この、コミックバンドが！」

曲をバックにぼくもにやにやする。笑ってくれるとすごくほっとする。こういう音が何を狙っているのかちゃんと通じていることにも安心する。大真面目で甘ったるいのと勘違いされたりすると目も当てられないから。

「モータウンだね」リズムセクションを聴いて君はつぶやく。そうだよ。君の好きなモータウンだよ。歌詞を聴いて君は吹き出す。「こら！ 冒涇だよ、モータウンに対する」

ぼくは少しこわばった顔で笑顔をつくる。大事なのはここからだからだ。君はそのままコメントをつけずに曲に聴き入る。そしてまず最初のポイントがやってくる。

敬語をつかちまうんだ君に。
年上でもないのに。アネゴ肌。
デートに誘えないんだ君を。
いざというときココロは鳥肌。

君の表情が消えたように思える。そして間髪入れず、サビのフレーズが流れる。

君の心にノミネート
そでなきや人生ターミネート

「なんだそりゃあ」君は笑う。「ノミネートなんか狙ってないで賞を獲りにきなよ」
「まあそうなんだけどさ」笑顔を見て半分安心する。そして半分がっかりする。「まあね」

それからすぐにもう一つのポイントが来る。

毎日だって会って話す君に。でも、
その時や完全に舍弟さ、アネゴ肌。
だからぼくには忘れられない君の

真冬の花火に照らし出されたその素肌。

君は強い視線をぼくに送る。怒ったのだろうか。個人的なエピソードをこんなところに使ったことに。ぼくらが二人だけで見たあの真冬の花火のことを。そしてまたサビのフレーズ。

ほらほらここはよく見ねーと
この瞬間をラミネート

エンディングに向けて君は目を伏せ曲に聴き入るような様子を見せる。この曲をどう受けとめたのか、ぼくには想像もつかない。心臓がやけに早く打って胸から転げ出しそうだ。曲が終わる。君が目を上げる。

* * *

「いかがでした？」

「まさにこれです、飲みたかったのは」

「そんな気がしましたよ、お客さんの様子を見て」

「なんて名前ですか。このカクテル」

「いえまだ決めてないんです」

「どうして」

「最初はフリーザーって呼んでたんですが、ちょっとニュアンスが違って」

「確かに。冷凍っていうより、もっとそのままの鮮やかな色と形で、大切な瞬間をいつでも……
。あっ」

「何か思いつきましたか？」

「あの。これから出るぼくのデビュー曲のタイトルなんですけど」

「はい」

「ラミネートなんてどうですか？」

隣でグラスを揺らしていた君が吹き出してツッコミを入れる。

「調子に乗るんじゃないの！ それに、あのタイトルはわたしだけのものなんだから」
同じカクテルが君の口元で揺れる。

(「ラミネート」 ordered by こあ-san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro)

感謝の言葉と、お願い&お誘い

Sudden Fiction Project（以下SFP）作品を読んでいただきありがとうございます。お楽しみいただけましたでしょうか？ もしも気に入っていただけたならぜひ「コメントする」のボタンをクリックして、コメントをお寄せください。ブックログへの登録（無料）が必要になりますが、この機会にぜひ。

「気に入ったけどコメントを書くのは面倒だ」と言うそのあなた。それでは、ぜひ「ツイートする（Twitter）」「いいね！（Facebook）」あたりをご利用ください。あるいは、mixi、はてな等の外部連携で「気に入ったよ！」とアピールしていただくと大変ありがたいです。盛り上がります。

※星5つで、お気に入り度を示すこともできるのですが、面と向かって星をつけるのはひょっとしたら難しいかも知れませんね。すごく気に入ったら星5つつける、くらいの感じをご利用いただければ幸いです。

現在、連日作品を発表中です。2011年7月1日から2012年6月30日までの366日（2012年はうるう年）に対して、毎日「1日1篇のSFP作品がある」という状態をめざし、全作品を無料で大公開しています。→[公開中の作品一覧](#)

SFP作品は、元作品のクレジットをきちんと表記していただければ、転載や朗読などの上演、劇団の稽古場でのテキスト、舞台化や映像化などにも自由にご活用いただけます。詳しくは「[Sudden Fiction Project Guide](#)」というガイドブックにまとめておきました。使用時には、コメント欄で結構ですので一声おかけくださいね。

ちょっと楽屋話をすると、7月1日にこのプロジェクトを開始して以来、日を追うごとにつくづく思い知らされているのですが、これ、かなり大変なんです（笑）。毎日1篇、作品に手を入れてアップして、告知して、[Facebookページ](#)などに整理して……って、始める前に予想していたよりも遥かに手間がかかるんですね。みなさんからのコメント、ツイート（RT）、「いいね！」を励みにがんばっていますので、ぜひご協力お願いいたします。

読んでくださる方が増えるというのもとても嬉しい元気の素なので、気に入った作品を人に紹介して広めていただけるのも大歓迎です。上記Facebookページも、徐々に充実させてまいりますので、興味のある方はリンク先を訪れて、ページそのものに対して「いいね！」ボタンを押してご参加ください。

10月からは「1日1篇新作発表」の荒行（笑）を開始し、55作品ばかり書き上げる予定です。「[急募！お題 この秋Sudden Fiction Project開催します](#)」のコメント欄を使って、読者のみなさんからのお題を募集中です。自分の出したお題でおはなしがひとつ生まれるのって、ほくも体験済みですが、かなり楽しいですよ！ はじめての方も、どうぞ気軽に遠慮なくご注文ください（お題は頂戴しても、お代は頂戴しないシステムでやっています。ご安心を）。

こんな調子で、2012年6月30日まで怒濤で突き進みます。他にはあんまりない、オンラインならではの風変わりな私設イベントです。ぜひ一緒に盛り上がってまいりましょう。

アネゴ肌

<http://p.booklog.jp/book/35368>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/35368>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/35368>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.